

## N 棟前のひろばとしての存在 その可能性

建築社会基盤系学科4年 猪股航平

私たちはN棟前の緑地空間に、場所・存在・表象が一致するポテンシャルがあると考えました。実際にも、N棟-正門間のキャンパスの顔となる場所には、緑豊かな空間が表れています。そこに私たちは本プロジェクトにおいて、アクティビティの下地を適切なスケールで置こうとしました。そのアクティビティの起点となるアフォーダンスは様々な活動を誘発し、キャンパスの顔にふさわしい学生が様々に集うひろばとしての存在を獲得できるのではないのでしょうか。このような思いからこのプロジェクトは動き出していきました。



図 1:木陰 ベンチ 樹木

室蘭工業大学構内の生活環境として、誰もが利用できる、あるいはゆったりと過ごせる空間は十分に供給されているとは言えません。また近隣の地域住民にとってもキャンパスには公園的な公共空間としてのあり方も期待されているのではないのでしょうか。これらのことから新たな休憩スペースに対する需要は少なくないと思われます。一方で、N棟前の緑地空間は豊富に植樹されており、立派な樹々はその陰を落とします。よく晴れた日にはそこ通り抜けるのがとても気持ち良いものです。しかし、それは街路としての特性が強く、広場としての全体性を有していません。

では、どうすれば「ひろば」を獲得できるのでしょうか。

強い求心的な構造体を設置しては広場としての全体性を取り戻すことは難しいでしょう。より小さく、さりげない方法でN棟前の広場に全体性を持たせることが出来れば、学生にとっても、或いは地域住民にとっても魅力的な公園空間、新たな休憩スペースが創出できるのではないかと、そう私たちは考えました。

そのために、私たちはその空間の環境に応答して地面が隆起するような、マッスとしてのベンチを考案しました。マッス、つまりは地面の延長であることで、座るという行為だけではない様々な行為がアフォードされる。さらにその小さな地面において様々なアクティビティがそれぞれの部分において同時存在的に発生することで、全体としてのひろばが立ち現れる。その結果として、様々に集う

学生の活動が表出するキャンパスの顔としての存在を獲得したいと考えました。

さらに、環境に応答するため、そして地面の延長としてのベンチとするためにコンター(等高線)を現すことにしました。等高線を立体で現すことで地形を理解する、建築の敷地模型などによく使われるコンター模型というものがあります。その原理をベンチに適用し、等高線を現すことでそのマッスは純粋な幾何学を回避し、環境の一部となるようにしました。このような環境のリノベーションによってアクティビティと自然との緩やかな重層的環境をつくりたいと考えていました。

私たちは実際にベンチを制作し、その緑地空間においてみました。現実の中では、我々の予想以上の出来事が起こっていったのです。日の入る時間帯によっては、木陰が落ちてくることでベンチは砕かれたように、地面に溶け出す。紅葉が落ち、それらが堰き止められたように集積する。雪が積もり、風が吹くことによってその軌跡が可視化され、新たなる線が自然に作られる。といったように、自然は新たなる地面に対して、応答するかのように様々に表情を見せたのでした。



図 2：秋 ベンチと木陰



図 3：冬 ベンチと雪 風

しかし、気候の良い時期には素晴らしい環境になりますが、気温の下がる時期には、あまり屋外で活動できる範囲は大きくありません。やはり、積雪寒冷地において通年で利用出来るようにするためには、囲い込むものがが必要です。人間が活動できる環境を担保するために囲い込みながら外部と関係を取り持つ。そのような空間が必要なように思われます。



左上:制作の風景。コンターの墨出しにプロジェクタを用いた  
右上:模型による検討。1/100スケールで周辺も含めて検討した  
左下:「新しい風」とベンチ。木の下で囲まれたような空間。  
右下:木陰の様子。天気の良い日には風も吹き快適。